

(2025 年 4 月 29 日発行)

日本口腔顔面痛学会理事長 小見山 道

広報委員会担当理事 山崎英子/委員長 池田浩子

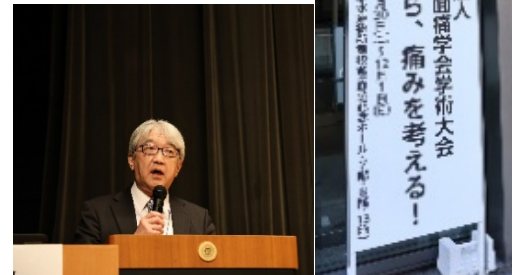
今回は、2024 年 11 月 30 日-12 月 1 日に行われた第 29 回日本口腔顔面痛学会学術大会についてアップル歯科の川田真由美先生に報告していただきます。

第 29 回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告

アップル歯科 川田真由美

第 29 回日本口腔顔面痛学会学術大会は 2024 年 11 月 30 日-12 月 1 日に、会場として東京歯科大学水道橋校舎新館にて行われ、COVID-19 の感染対策として、昨年に引き続き 4 年連続の現地開催・後日オンデマンド配信でのハイブリッド開催となった。

大会長である福田謙一先生(東京歯科大学 口腔健康科学講座、障害者歯科・口腔顔面痛研究室)から開会のご挨拶があり、本学術大会のテーマは「脳機能から痛みを考える！」であり、口腔顔面痛を理解するため、日常臨床に活かす上でも、脳機能を学ぶことは不可欠であることから、脳機能研究で著名な先生方をお迎えし、さらに多岐に渡るプログラムを企画したとの事であった。



開会の挨拶 福田大会長

<1 日目>

シンポジウム 1

「痛覚変調性疼痛」としての口腔顔面痛を脳機能としてどう捉えるか？」

坂本英治先生(九州大学病院顎口腔外科口腔顔面痛外来/九州大学病院集学的痛みセンター)が痛覚変調性疼痛は脳機能の変調により生じるという仮説を背景に、前頭前野における脳波の計測が、慢性疼痛患者や口腔顔面痛患者の特性の理解、ひいては痛覚変調性脳の評価への有用性について解説された。



座長の小長谷先生、坂本先生

大野由夏先生(明海大学歯学部病態診断治療学講座歯科麻酔学分野)が、内因性疼痛調節機能に関わる CPM(conditioned pain modulation),OA(offset analgesia),TSP(temporal summation of pain)を評価することによって、急性痛発症高リスク患者の予測や、鎮痛薬作用機序の解明、薬剤感受性のスクリーニングにつながる可能性があるとして解説された。

河端和音先生(鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座)が、口腔顔面領域の痛覚変調性疼痛の概念、病態メカニズム、診断、治療方法の現状について解説されたあと、症例提示を通して、痛覚変調性疼痛を診療するための考え方のポイントをわかりやすく述べられた。

教育講演 1

「臨床研究のすすめ」

康永秀生先生（東京大学大学院医学系研究科臨床疫学-経済学）は、論文の検索方法や読み方、臨床研究の種類や方法について理解しやすく解説された。また臨床研究の原則として、研究に用いる統計解析はデータ収集前に決めて、それに従って実施しなければならないとの心得を示され、研究デザイン・計画の事前準備の重要性について述べられた。臨床研究へのモチベーションが上がる講演であった。

教育講演 2

「慢性疼痛の脳内メカニズム」

倉田二郎先生（東京慈恵会医科大学医学部麻酔科学講座）は、fMRI を用いた疼痛関連脳活動部位や痛みを調節する脳内メカニズムについて、大変わかりやすく解説された。慢性疼痛患者における脳活動の減弱や、痛みの調節機構・脳内ネットワークの機能低下を示唆された。さらに、最終的には慢性疼痛の治療ターゲットとして、“脳力”＝自然治癒力の向上について、ほっこりするような論文とともに結論付けられた。

シンポジウム 2

「痛みの受容、認知、行動そして中枢感作からマインドフルネスへー心理学、神経科学、看護学、その学際的連関へ」

照光 真先生（北海道医療大学歯学部歯科麻酔科学分野）は、中枢感作と痛覚変調性疼痛の仮説として複雑系メカニズムが関連していること、慢性疼痛では内受容感覚・顕著性・報酬系神経回路の機能不全が生じていることを示唆された。また認知/行動科学と神経科学をドッキングした仮説を提示され、慢性疼痛における脳の神経科学の詳細について解説され、大変充実した内容であった。

梅田 聡先生（慶應義塾大学文学部心理学専攻）から、心理学的知識を背景に、内受容感覚（心拍や呼吸、消化管の動きなど体内の様々な部位からの情報の知覚）の鋭敏化による感情感受性の変化など生理学的なメカニズムを交えて解説された。気圧の影響による心臓内受容感覚の違い、自律神経反射および心理的ファクターとの関連性を示し、気圧の変化を予測して、自律神経の段階において内受容感覚の変化を把握することは慢性疼痛を考える上で重要であるとの見解を述べられた。

朴 順禮先生（慶應義塾大学看護医療学部）は、マインドフルネスの概要を解説された。がん患者には様々な心配や気がかりがあり、それについて過去や未来に反芻することで、抑うつ・不安が生じ、それらを心の流れの出来事として捉える脱中心化が、マインドフルネスの中核的機能を果たすとした。実際の乳がん患者のマインドフルネス教室のプログラムを提示し、介入前後でがん患者の感情の変容が見られ、Well-being をもたらし、臨床での有用性を紹介した。

入門講座 1

「口腔顔面痛に必要な解剖学(神経編)」

金銅英二先生(松本歯科大学解剖学講座教授)は、口腔顔面痛のメカニズム検討や治療を行う際に必要な神経解剖学について、神経の形態と機能を、イラストを用いながら体系的にやさしく解説された。末梢神経系と中枢神経系の機能について大変理解が深まった。

入門講座 2

「口腔顔面痛に必要な生理学」

黄地健仁先生(東京歯科大学生理学講座講師)は、口腔顔面痛の理解に必要な神経生理学の基礎知識について、末梢神経、特に体性感覚の種類や受容器等を復習した。侵害刺激を受容し、興奮を伝導、伝達するニューロン、大脳皮質感覚野への投射経路について臨床を想定しながら解説された。

特別講演 1

「医療経済：医療 DX の実例，そしてその先へ」

武藤真祐先生(株式会社地域ヘルスケア連携基盤代表取締役会長・医療法人社団鉄祐会理事長・株式会社インテグリティ・ヘルスケア代表取締役会長・東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)を迎え，医療需要の変化に伴い，日本が掲げる政策としての医療 DX を推進方策についてご講演頂いた。医療 DX の実例や AI 分析ツール，クラウド，情報ネットワークを活用した様々な事業展開について紹介され，歯科を含めた医療イノベーションの可能性を感じさせる内容であった。

リフレッシュコース 1

「口腔顔面痛における口腔機能管理の実例」

島田 淳先生(医療法人社団グリーンデンタルクリニック)は，TMD 患者では口腔機能が低下していることがあり，口腔機能管理が重要であると述べられた。また自覚症状がない，かくれ TMD 患者をいかに見つけ出し，早期の疾患教育やセルフケア指導をすることの必要性を述べられた。そして，その一連の過程において多職種連携が必要であるという，これまでの歯科の考え方を一新する話であった。

リフレッシュコース 2

「口腔顔面痛とブラキシズム」

原 節宏先生(日本歯科大学附属病院総合診療科顎関節症診療センター/口腔顔面痛センター)は，クレンチングは咀嚼筋にとって最も安全な活動であり，疲労回復の可能性を示唆した。その上で，ブラキシズムは口腔顔面痛の原因になりうるかという問いかけに対して，ほぼ NO であるという，今までのブラキシズムの悪習癖説を覆す，驚くべき理論を述べられた。

教養講座

「歯痛と痛み制御の歴史と，歯科の教育・臨床の変遷」

金子 譲先生(東京歯科大学)より，近代医学は全身麻酔の発見が幕開けとなり，歯科医師が先駆けになってきた歴史や，戦前の歯科医専と現在の歯科大学・歯学部，大正中期の大学令，1926 年の Gies Report による米国歯科医学教育改革，連合国軍占領下の歯科医学教育改革についてご講演され，日本や米国において，長きに渡る歴史の中での歯科医学教育制度の変遷について知ることができて，感銘を受けた。

吉澤信夫先生(山形大学医学部)により，古代から江戸期までの日本医学史で診療科として口中科という名称の論争，平安時代の現存最古の医書である丹波康頼著の「醫心方」(全 30 巻)や，室町時代にその子孫である丹波兼康によって口中科が発展されたことを，歴史書物や絵図を交えて解説され，ご講演のラストには口中科独特の特性により，現代まで衰退の一途を辿ってしまった理由がわかる内容であった。

ハンズオンセミナー 2

「超音波併用筋膜リリース」

山崎英子先生(医療法人和英雅会ルアナデンタルクリニック口腔顔面痛外来)，和嶋浩一先生(元赤坂デンタルクリニック 口腔顔面痛センター)がコーディネーターとなり，筋・筋膜性疼痛に対する超音波併用のトリガーポイントプレッシャーリリースについて実習を行った。基礎知識よりも相互実習に重点を置いて，筋触診，超音波照射，筋膜リリースの方法を習得した。参加の先生方は，お互いに筋触診を行いながらトリガーポイントの存在を確認し，超音波照射と筋膜リリースによる圧痛改善の効果について身をもって感じられたようで，ハンズオンならではの実際に体感することで理解が深まった場面であった。

OFF 開業臨床医のためのコミュニティ (OCPD) 症例相談シンポジウム

山崎英子先生(医療法人和英雅会ルアナデンタルクリニック 口腔顔面痛外来)がコーディネーター、木津真庭先生(鷹栖歯科・口腔外科)が座長、和嶋浩一先生(元赤坂デンタルクリニック 口腔顔面痛センター)がディレクターを務められ、「日常歯科臨床において遭遇する、歯原性および非歯原性歯痛 4 症例に対する多角的テーブルディスカッション」が行われた。参加者は口腔顔面痛の 4 つの症例のいずれかに関心のある症例に分かれ、症例ディスカッションした。症例 1 は「連携した精神科医と特発性歯痛患者の関係が上手くいかず対応に苦慮した 1 症例」を板橋基雅先生(いたばしデンタルクリニック)、症例 2 は「歯内療法が



症例相談シンポジウム

グループ毎にディスカッション

終了したにもかかわらず、痛みを訴える患者の症例」を大塚友乃先生(山王病院歯科インプラントセンター)、症例 3 は「痛みと新義歯作製を訴え短期間に複数の歯科医院を受診する患者」を玉川敦子先生(鈴木歯科医院)、症例 4 は「高齢者で認知症が疑われ、対応に苦慮している口腔顔面痛症例」を川田が症例提示した。グループディスカッションでは、ファシリテーターとして、症例 1 は和気裕之先生(みどり小児歯科)、症例 2 は石井隆資先生(日本歯科大学附属病院総合診療科)、症例 3 は大久保昌和先生(日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座)、症例 4 は宮地英雄先生(こころのホスピタル町田)が務められ、症例 4 では飯沼英人先生(風の杜歯科 口腔顔面痛クリニック)が司会進行をされた。最後に各症例提示者から、ディスカッションで得られた成果のまとめの発表があった。当初の予想を上回る大勢の先生方にご参加頂き、非常に盛況な活発な実りのあるセッションであった。

一般演題ポスター

ポスター会場では全 30 演題のポスターを参加の先生方は黙々と見入っていた。1 日目のお昼過ぎに発表者が参加しての 50 分の討論が行われ、ポスターの前では発表者を取り囲んで談論風発、大いなる熱気がポスター会場から発せられていた。

<2 日目>

シンポジウム 3

「舌痛症の病態生理に迫る！ー脳画像研究から中枢作動薬の反応性までー」

豊福 明先生(東京科学大学大学院 医歯学総合研究科医歯学系専攻全人的医療開発学講座 歯科心身医学)が、舌痛症の脳画像研究から脳回路の複雑性を示唆し、神経の化学的な連結から治療の糸口が見い出せると示唆した。

笠原 諭先生(東京大学医学部附属病院麻酔科痛みセンター)が、痛覚変調性疼痛の解明のために、ADHD との関連性、ADHD 治療薬と脳機能変化の評価、分析によるバイオマーカーの決定、ADHD の行動所見・評価尺度を用いたスクリーニングの重要性を解説された。

篠崎貴弘先生(日本大学歯学部口腔内科学講座)が、舌痛症患者の f-MRI 画像で、疼痛調節機構に関する脳領域の活動部位の違いを解析し、舌痛症の特異な病態の根拠を述べられた。

教育講演 3

「歯痛の細胞分子生理学を再考する」

澁川義幸先生(東京歯科大学生理学講座)は、今まで機序不明だった象牙質痛発生機構について細胞分子生

理学を再考しながら、最新の知見とともにご講演された。また歯痛の特徴や鑑別などの臨床的側面、ステロイド由来歯痛についても解説され、全体を通して、臨床における象牙質・歯髄疾患の病態理解・診断にとって大変意義深く、インパクトが強い内容であった。

教育講演 4

「疼痛・鎮痛個人差の遺伝子メカニズム」

池田和隆先生（公益財団法人 東京都医学総合研究所依存性物質プロジェクトリーダー／国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部）は、疼痛・鎮痛薬感受性に個人差があることから、遺伝要因に着目し、関連遺伝子多型の同定、遺伝子メカニズムを解説した。患者の疼痛・鎮痛感受性の予測から早期から1人1人に合った鎮痛管理ができるということで、近い将来、テーラーメイド疼痛治療の実現が楽しみな内容であった。

シンポジウム 4

「ブラキシズムと脳機能」

島田明子先生（大阪歯科大学医療保健学部口腔保健学科）はブラキシズムの定義・概念について解説し、Patho-bruxism(病的)を管理し、Normo-bruxism(正常範囲)に戻すということを目標にブラキシズムのスクリーニングおよび評価ツールの活用や、マネジメントについて最新の知見を述べられた。

飯田 崇先生（日本大学松戸歯学部クラウンブリッジ補綴学講座）は、ブラキシズムにおけるクレンチング、グラインディングといった下顎運動が全身の恒常性を保つ目的がある可能性や、日常生活において無意識下で行われている下顎運動によって中枢神経の可塑性変化が生じているとの見解を述べられた。

大倉一夫先生（徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野）は、ブラキシズムは睡眠中の非特異的覚醒反応の一表現型であると述べた上で、睡眠の質を向上させることで睡眠中途覚醒が減少し、結果的に睡眠時ブラキシズムが減少する可能性があるとして解説した。

入門講座 3

「一般歯科臨床で役に立つ歯痛診断」

和嶋浩一先生(元赤坂デンタルクリニック 口腔顔面痛センター)は、口腔顔面痛の診断精度を上げるために、分析的アプローチの仮説演繹法の利点をパターン認識法に活かすため、診断過程を可視化する技法を示され、直感的な歯痛診断にも臨床診断推論が応用できることを伝授された。最後に質問された先生への返答として“患者への説明は Honestly !”という閃光のような名言が会場を席卷した。

入門講座 4

「口腔顔面痛の治療で使われる薬物療法・漢方も使ってみませんか？」

山崎陽子先生(東京科学大学大学院医歯学総合研究科歯学専攻口腔機能再構築学講座歯科麻酔科学分野)は、口腔顔面痛の薬物療法としての漢方薬について、構成生薬を解説しながら効能・効果、注意点を示され、西洋薬に加えて治療の選択肢を広げられる講座であった。

特別講演 2

「感染対策：ポストコロナにおける新興再興感染症に対応できる歯科院内感染対策の実践」

泉福英信先生(日本大学松戸歯学部感染免疫学講座教授)は、COVID-19 流行を機に見直された歯科医療における院内感染対策の今後について解説された。COVID-19 は口腔組織に感染し、唾液中にウイルスが存在し、食事、会話等で感染することが明らかとなり、口腔の重要性が改めて感じられた。飛沫と重力の関係性について

ての研究から、歯科治療における飛沫対策を強化した院内感染対策を導入し、う蝕および歯周病予防を含む歯科医療を積極的に行うべきだと強調され、具体的な対策方法も示唆された。

リフレッシャーコース 3

「医療面接の重要性や認知行動療法について」

渡邊友希先生（昭和大学歯学部歯科補綴学講座顎関節症治療学部門）は、医療面接や認知行動療法において、患者と良好な関係性を構築するために良質なコミュニケーションをとるにあたっての必要な患者への配慮について解説され、医療者と患者との関係が ON になるような対話を参考例に示され、明日からの医療面接をより良きものにできそうであった。

リフレッシャーコース 4

「片頭痛の診断と治療、および頭痛専門医との医療連携の行い方」

井川雅子先生（静岡市立清水病院口腔外科）は、片頭痛の病態生理、症状および分類と治療、頭痛専門医への紹介についての印象深い解説とイラストにより、わかりやすく記憶に定着しやすい講座であり、頭痛を勉強されている先生に受講されることをお勧めしたく、来年度もリバイバルの呼び声が高いと思われた。

参加感想：地方から遠征した者にとって、まるで羅針盤のような、学会会場への案内図が表紙を飾るクリエイティブなプログラム・抄録集を携え、現地に喜び勇んで赴いた。会場に着くと、いよいよ始まるのだと期待が高まった。会場では久々に再会できた先生方や初対面の先生方にもご挨拶ができた。また普段では味わえない学術大会の特殊な雰囲気さらに心躍り、目と耳を研ぎ澄ませて講演を拝聴した。口腔顔面痛の勉強を2年前に始めたばかりなので、ほぼすべての講演が画期的に感じられた。痛みは脳機能まで画像解析されており、今回、大変学びになった。さらにオンデマンド配信もあり、現地参加だけでは成し得なかったパラレルなプログラムも視聴できるという大変ありがたい学術大会であり、この大会を準備、尽力されたスタッフ、すべての方々に感謝と拍手喝采をお送りしたい。

【川田真由美(かわたまゆみ)先生のプロフィール】



【略歴】

2012 年 東北大学歯学部卒業

2012 年 札幌医科大学附属病院（歯科口腔外科）研修医

2017 年 札幌医科大学大学院医学研究科分子器官制御医学専攻医学博士取得

2017 年 市立函館病院歯科口腔外科

2018 年 札幌歯科口腔外科クリニック

2021 年 アップル歯科入局

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp